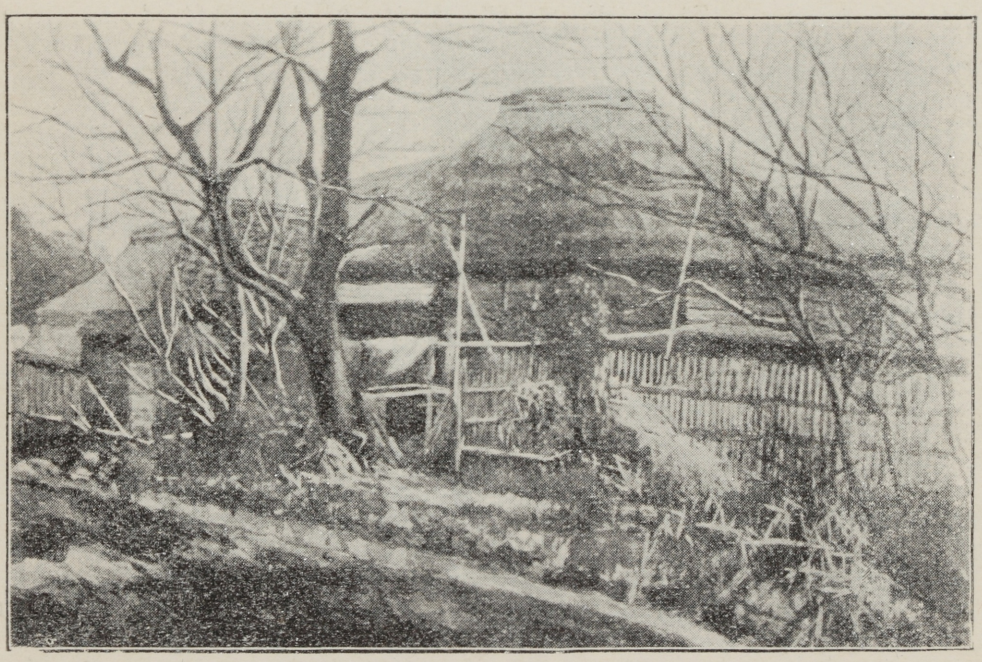
種々の流派があつて、數へ方に多少の差がある。白百合は普通山地に發生する野生のもので、食物とする百合は何んな花であるか終に發見しなかつた。**オゲサンン**がいふには、赤い花が咲く、けれども、庭園中を探しても遂に見當らなかつた。鎌倉附近の田舍家の家根は厚く葺いてあつて、屋根の頂に一八艸の附いて居る土が載せてあるで、青い葉がすい〳〵と出てゝ居る。七月頃、その近くによくあるのは紫陽花で、球のやうな花が澤山に咲いて、若い時は蒼い黄な綠の花が、時を經るに從て、鮮な藍色から紫色に變ずる。

△　△　△

新渡部稻造氏曰く、美術の美の字、是は羊の下に大といふ字が書いてある、支那人の思想といふものは恐らく大きな羊を願ふのであらう、日本では餘り見ないが、支那では羊を取つて食ふのであるから何でも大きい方がよい。美の思想とは一寸思はれない、それに反して、獨乙の美といふのは光、光明、若くは輝くといふ意味から出てゐる、豚の目方が何斤あるといふのとは譯が違ふ。英でも佛でも皆前のやうな意義から出てゐる。光明といふ語から割出した、若くは思想から割出した美術と、羊の肉何貫目といふ所から割出したのとは現はし方が少し違ふのである。(なでしこ)



水彩畫研究所四月例會三等

藤田紫舟筆